

時期変えるだけで 国際人は育たぬ 入試改革の方が先

東京大学は、5年後をめどに「秋入学」に全面移行する、という素案を公表した。同時に、他の主要大学にも協議を呼びかけている。しかし、秋入学だけで大学の国際化が進むのか、高校卒業後の空白期間をどうするか、議論すべき課題は多い。自由の気風と反骨精神の伝統で知られる京都大学の松本紘総長に聞いた。

■ 東大が提言した「秋入学」を、しておくのはよくない。私は、その議論する主要12大学の協議会に、京大も参加の意向を表明しましたね。東大に追随したいということですか。 「それは違います。協議会は、踏み絵のように秋入学についてイエスかノーかを短期間で決める場だとは考えていません。入試改革や教養教育のあり方など、大学教育が抱える様々な課題について議論する場として有意義だと願って参加するのです。そもそも、大学を国際化するためには、入学時期を変えるだけで進むものではありませんから」

■ 大学の国際化には、入学時期を世界標準の9月に合わせることも重要ではないですか。 「確かに、入学時期が一致していれば留学しやすくなります。しかし、学期の始まりを一致させるだけでは、わざわざ入学時期を変えなくてもいい。現在は前期、後期の2学期に分かれている Semester 制を1年を4期に分けるクォーター制にし、始業時期を変更すれば、空白期間をなくすことができるので留学が容易になります」

■ 海外からの留学生の受け入れを増やすためには、秋入学にすることが、今よりも英語での授業を増やすことが優先すべき課題です。日本に来る留学生にとって、日本語の習得のために半年程度を費やさなければならぬことが大きな障壁になっているのですから。 「東大は、高校卒業から秋の入学までの時期を「ギャップターム」と称して、ボランティア活動や短期の海外留学などの活動に充ててもらうことを想定しています」

■ 半年の自由時間を与えられたら、おそらく高校卒業生の大多数は、アルバイトをしてお金をためたり、短期の海外旅行をしたりして終わってしまう。海外の大学に留学できるのは、経済的余裕のある子弟だけではないでしょうか。 「未成年の若者を高校生でも大学生でもない、何の身分もない状態に

■ 従来通り、3月に卒業できます。本学の学生は実質3年半で卒業に必要な単位を修める実力を十分持っていますから」

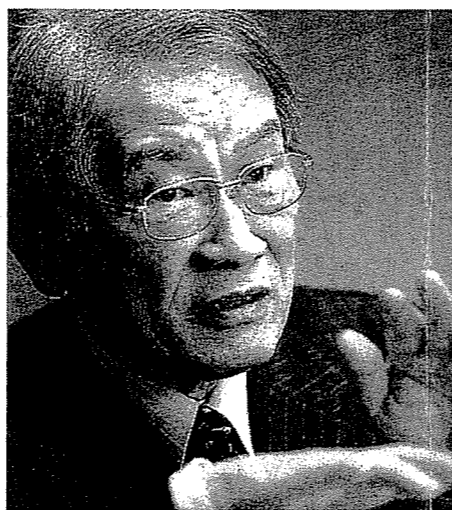
■ 入学時期の変更より、入試改革を優先すべきだと主張されていますね。 「日本経済が世界の中で存在感を低下させている主な原因は、いわゆるグローバル人材が育っていないことにあると思うからです」

■ 松本さんの考えるグローバル人材のイメージは。 「英語でコミュニケーションできるだけでなく、日本の歴史や文化を国際舞台で伝えられるような幅広い教養を身につけた人材です。真に創造的な仕事ができるようになるには、基礎的な知識の集積が不可欠なのです。現在の大学入試のような、限られた少数科目の点数競争ではもうダメ。複雑な問題にぶつかっても解決策を見つけたような幅広い基礎知識や、柔軟で強靱な思考力が必要ですね。また自分に自信を持っている若者が欲しいですね。何かをチャレンジした経験があり、さらに何かやろうという意欲のある人が必要です」

■ 現在の入学生の多くは受験で疲弊し、その癒やしに時間を費やします。ようやく勉学の真の面白さに目覚めるのは、年生々らしいです。ところが、そのころには就職活動が始まってしまうので、「グローバル人材を育ててほしい」という企業などの要望に十分には応えられていないのが現状です」

まつもと ひろし 京都大学総長 松本 紘 さん

42年生まれ。専門は宇宙空間物理学。京大超高層電波研究センター教授、同大理事・副学長などを経て、08年から現職。



「自らを重んじ自らを敬うこと、つまり自分を知ること。それが学問にとって重要だ」という意味です。 —京都市、伊藤菜々子撮影

■ グローバルに活躍するような若者を選ぶには、どのような入試が必要ですか。 「高校生が持つ知識、チャレンジ精神、創造性を何らかの形で評価する仕組みを入試に採り入れたいと思います。こういった要素が組み合わさって、新しいモノが生まれるのですから」

■ 「高校までの学びの『積分を進めていますね。』

意欲や創造性を 高校と連携し評価 点数偏重から脱皮

「2013年度に開設予定ですが、5年間の一貫教育で、幅広い教養と深い専門知識を備えたリーダになる人材を育てる大学院です。ほぼすべての授業を英語で行います。1、2年目は学位論文の研究、3年目は専門以外の幅広い教養分野の講義を受けてもらう。そして、4年目は海外の大学などに留学し、5年目は国内の企業や官庁などで自ら立案したプロジェクトに参加して実践を積み重ねてもらう」

■ 海外留学を含めて、5年間の学費はかなりの負担になります。 「1学生には年300万円の奨学金と100万円の研究費を提供する予定です」

■ なぜ全寮制ですか。旧制高校のように。 「従来の研究型大学院とは違い、人材育成型大学院なので、様々な分野の学生が日夜議論を戦わせることで教養の幅が広がるのです。それには研修型の寮舎制が適しています。また、将来のリーダになる人材を育成するのだから、24時間勉強できる環境を提供したいのです」

■ 入学定員は何人ですか。 「20人程度です。マスプロ(大量生産)ではなく、個々の学生の将来の志望に合わせたテラーモード(注文仕立て)のカリキュラムを提供する手作りの大学院なので、この人数が限界です」

■ そのような大学院はなぜ必要なのですか。 「かつて日本の繁栄を支えてきたのは人材でした。現在、日本は人口当たりの研究者数やGDP(国内総生産)当たりの科学技術研究費は世界1、2位を争っていますが、人材の質が低下しているため、それらが成長に寄与していない。私たち大学は人材の質を高めるためにもっと努力しなければならぬと思います」

■ 取材を終えて 東大総長が「大学の国際化のためには秋入学への移行が必要だ」と言えは、西の大学の雄、京大の総長は「入試改革も合わせて検討すべきだ」と応じる。大学が抱える課題は、複雑で奥深いというところだろう。日本の未来を担う若者を育てる大学の姿を決める話だけに、拙速ではなく、徹底的に議論を深めてもらいたい。(山口孝一/山本晴美)

2012年2月17日(金)朝刊15面

※ 朝日新聞社の許可を得て掲載しております。 無断で転載・複写することを禁じます。